

大正初期の作文教育論

— 垣内松三氏のばあい —

野 地 潤 家

垣内松三の国語教育論（とくに、読むこと・解釈・批評を中軸にした）は、「国語の力」（大正11年5月8日、不老閣書房刊）の刊行以降、世の注目を浴び、独自の展開をとげるようになった。したがって、今までのところ、垣内松三研究においては、大正後期以降の国語教育論が主として考察され、それ以前の垣内の国語教育論については、一部の報告により明らかにされたものを除いて、まだまだまびらかにされていない面が多い。

本稿では、大正初期、東京女高師時代に、垣内松三教授がどのような作文教育論を持っていたかを、その著「**作文教科書**」（巻三・四）を手がかりとしてみいくことにする。「石叫ばむ」（大正8年7月8日、不老閣書房刊）・「国語の力」刊行以前に、こうした女学校用作文教科書が編まれていたことについては、今日まで紹介されていないのである。

「**作文教科書**」は、巻一から巻四までのほか、「書翰」に関する巻があり、計五冊から成っていたようである。しかし、巻一・巻二・「書翰」の三冊は未見で、わたくしの手もとには、巻三・巻四の二冊しかない。両巻ともに、大正五年（一九一六）一月二四日に宝文館（東京・大阪）から刊行・発売されている。定価は、ともに金二十五銭であるが、大正十一年度の臨時定価は、四十八銭となっている。菊判和綴じ、巻三は、九二ページ、巻四は、一〇六ページから成る。著者の肩書には、東京女子高等師範学校教授 文学士とあり、垣内松三著となっている。女子生徒用作文の副読本であって、文部省検定済の印などは見られない。

二

「**作文教科書**」巻三は、作文学習のうち、推敲法を中心にして、組織され、それら、つぎのように総括されている。

推敲法

一 構想法

- 1 思想の成立——イ
- 2 思想の整頓——ロ

二 措辞法

一、結構法

- 1 文の組立——ハ
- 2 句法——ニ

二、用語法

- 1 言語の選択——ホ
- 2 辞様——ヘ

三 表現法

- 1 段落——ト
- 2 句読——チ
- 3 文字——リ

(同上書、卷三、八六六)

これらが、さらにつぎのように編成されていたのである。

一 作文の力

二 構想法(その一)

一 思想の成立

イ 観察

ロ 思索

附 記事文、叙事文、論説文の区別

- 問題 一 校庭小景 二 途上雑記 三 雑記帳より

三 構想法(その二)

二 思想の整頓

イ 連統法

ロ 并列法

ハ 因果法

問題 表示法

四 結構法(措辞法の二)

一 文の組立

イ 文の形態

ロ 文の段落

- 問題 一 花のいろく 二 夜

五 結構法(措辞法の二)

二 句法

イ 正叙法

ロ 曲叙法

1 漸層法

3 重言法

5 倒置法

7 否定法

問題 一 夏の日記 二 夏の手紙

六 用語法(措辞法の三)

一 言語の選択

問題 一 雑記帳より 二 途上日記 三 修養日記

七 用語法(措辞法の四)

二 辞様

1 比喩

6 相換

問題 一 「伝記」を綴れ 二 「急がばまはれ」に就いて

2 対照

7 語趣

8 易名

3 反語

9 擬人

10 含蓄

4 誇張

5 隱喩

問題 一 「伝記」を綴れ 二 「急がばまはれ」に就いて

三「初雪やくばり足らいで比枝ばかり」の意を

八 表現法

一 段落

二 句読

三 文字

問題 一 辞書競争 二 カード練習

九 総括

十 第三「私の文集」

問題 一 第三「私の文集」跋

初めに、序章として、「作文の力」(第一章)を置き、本論に、「横想法」(第二・三章)・「措辞法」(「結構法」(第四・五章)・「用語法」(第六・七章)・「表現法」(第八章)を据え、まとめとして、「総括」(第九章)を置き、おしまいに、「第三『私の文集』」(第十章)を据えて、整然とした編成になっているのである。

三

右の組織のうち、序章「作文の力」(第一章)には、著者垣内松三教授の作文観が端的に述べられている。

一 作文の方

作文の練習には二の注意すべき方面がある。一は思ふまゝを書き現はすこと、二は書き現はした結果が有効なることである。

思ふまゝを書き現はす目的は

一 我が思ふことがらを人に知らせるため

二 我が心に映じたる印象を記すため

三 我が心に感じたるまゝを叙するためである。

我が思ふことがらを人に知らせるために書く文は明確、我が心に映じたる印象を記すために書く文は精緻、我が心に感じたまゝを書く文は真摯である。読者をしてかく感ぜしむるを得ば文の目的は始めて有効に達せられたのである。

されば「よく分る」「おもしろい文」の原因は一に文を書く心を錬ることである。更にこれを別けていへば、一は我々の真心を表はすため、二は読者の心もちを察して自分の思ふことがよく理解せられるやうに細く行届いた注意をすることである。此の理由に依りて我々は先づ全心の力を挙げて思想の発表に竭くさねばならぬ。又読者を顧慮する一片の誠意がなければならぬ。もしこの二つの注意が文の上に表はれたら始めて「よい文」となるのである。

而してこの二方面に亘りて注意すべき事項が「考へ方」「いひ方」「書き方」の三であることは既に学んだ(引用者注、卷一・卷二においてのことを指すものと考えられる)。されば「よい文」を書くために学ぶべきことはいかにせば

一 考へ方
二 いひ方
三 書き方
明確・精緻・真摯なる

を得べきかである。

然しながら茲に特に注意を要するのはこの三つの事項は文の三部

分ではない。文の発展の三方面であることである。試に我々は今海岸に立ちて港に入り来る船を見て居ると想へ。水とも空とも見分けられぬ通かなる水平線上に現はれたる一点の黒子が、一瞬一刻に大きくなって、一条の黒煙・数本の帆船も鮮に認められ、次第に近くづくに従つて甲板の上に動く人影も数へられる。暫くする間に霧を蹴つて入り来る巨船のはや我々の面前に巍然として山の如く横はるのを見るのである。文も亦かくの如く、始めは茫々としてまとまりのない考えをまとめると、次ぎから次ぎへと進んで段落を生じ、語句を見出し、これを紙上に記すに至るのである。故にこの三つを切斷して考るのは只作文練習に於て注意すべき事項を明にするためである。実はこの三者は互に連絡して離るべからざる心の作用である。然るに作文練習の間によく心が動揺して「考へ方」にのみ目を注ぎたり「いひ方」「書き方」に偏して心を用ひることがあるのは誰も経験することであるが、文は決してこの三つの一に偏してはならぬ性質のものである。一つの文は必ずこの三方面から深く精しく考へて訂正しなければならぬのである。もしその一を缺いても、きづのある文となる。されば「よく分る文」「おもしろい文」はこの三方面の注意が全てよく行届いた時に始めて綴れるのである。この作業を推敲といふ。

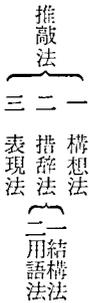
人々によりて文を書くのにいろいろの習慣がある。ある人は考がまとまると心の中に文の形がありくと見える。直ぐさま筆を採つて書き下す。又ある人は心の中に現はれたる文の形を心で潜めて訂正し整頓した後、筆を下す。又、ある人は文の形を得たら直ぐさま草稿を作り、幾度かこれを訂正した後始めて定稿を認む。一・二の文の書き方は直ぐ書けた文のやうに見える。三のみは甚だ筆が遅い

やうに考へられる。併しながらこれは文の書き方が遅いか遅いかといふだけであつて、腹稿もしくは草稿を推敲する心の作用は同一である。作文の力を自得するのは只よく推敲を試むるにある。故にもし作文練習に於てよく草稿を推敲する習慣がついたら、後には草稿を作らずして直ぐさま文が書けるやうになる。明敏な人は人と談話をしながら巻紙と筆を手にしてさらさらと手紙を書く不思議な力を有つて居るが、よく推敲の力を練習すれば、我々といへどもこの境地に達し得るのである。

「天は自ら助くるものを助く」作文上達の道も亦此の外にはない。克く苦心して推敲すればするほど著しく作文の力が増進する。自分でもよく分るほど日に月に進歩する。今日多くの学生の作文の力が十分でないといはれるのは、書き放しにして顧ぬからである。我々の作文課の作業は今や基礎漸く成りて茲に一層の高きに登らんとするに臨み、更に堅固なる決心と覚悟とを以て推敲の練習を積まねばならぬ。

推敲の事項は「考へ方」「いひ方」「書き方」である。従つて推敲の方法は「考のまとめ方」、「よきいひ方」、「正しき書き方」を考究するにある。これを構想法・措辞法・結構法、用語法に分つ。表現法といふ。以下順次にこれを説かう。

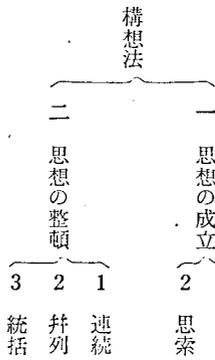
総括



(以上、同上書、卷三、一七)

巻三においては、右のように、作文の目的に二つあることを述べ、作文学習の三つの事項を指摘し、推敲の重要性について述べ、推敲の事項・方法についても示している。巻三としては、推敲法に重点をおいて、それらが整然とした組織の下に述べられ、簡明でむだのない説き方になっている。

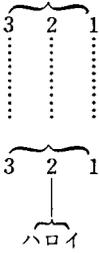
これらのうち、「構想法」については、



のように、具体例（四つの文章例）をもとに述べられた。

右のうち、「思想整頓の法」については、

「思想整頓の最も簡単な方法は表又は図を作ることであることは前に述べた。（第二巻五参照）表を作ると思想が鮮明に形の上に見える。従つて又、思想に軽重のあることも鮮明になる。たとへば我々の得た思想を



の如き表に作れば、常に思想が明に見えるのみではなく、表を書いて見て、始めて思想の不完全・不整頓の点を訂正することにも気づ

くのである。思想の不完全な点は更に増補し又は削除しなければならぬ。思想の不整頓な原因は多くは123の如き綱目とイロハの如き細条とを混同する為であるから、これ等の位置を書き改めねばならぬ。かくの如くすれば、いかなる深遠複雑なる思想でもよく筋が通るやうになるのである。」（同上書、巻三、一八一―一九ペ）

と述べている。当時すでにコンポジションにおけるアウトライン法が提起されていたのである。これは、思想排列の基本形態として、

1 連続式 $(\boxed{S} + \boxed{P}) + (\boxed{S} + \boxed{P}) + (\boxed{S} + \boxed{P})$

2 并列式 $\underbrace{\boxed{S} + \boxed{P}}_1 + \underbrace{\boxed{S} + \boxed{P}}_2 + \underbrace{\boxed{S} + \boxed{P}}_3$

3 尾括式 $\boxed{S} + \underbrace{\boxed{P} + \boxed{P}}_2 + \underbrace{\boxed{P} + \boxed{P}}_3$

4 頭括式 $\underbrace{\boxed{S} + \boxed{P}}_1 + \underbrace{\boxed{P} + \boxed{P}}_2 + \underbrace{\boxed{P} + \boxed{P}}_3$

5 両括式 $\underbrace{\underbrace{\boxed{S} + \boxed{P}}_1 + \underbrace{\boxed{P} + \boxed{P}}_2}_3 + \underbrace{\underbrace{\boxed{S} + \boxed{P}}_1 + \underbrace{\boxed{P} + \boxed{P}}_2}_3 + \underbrace{\boxed{S} + \boxed{P}}_1$

の五つを挙げているのとあわせて、注目すべきことである。構想法を、思想の成立・思想の整頓の両面からとらえ、「構想」についての学習の見通しをつけている点は、当時の作文学習論としてすぐれている。

「改作文教科書」巻三に掲げられた文章の具体例は、主としてつぎの諸書(稿)から採録されている。

○「高等小学綴り方^二学年用」、芦田恵之助著、大正2年2月10日、宝文館→例文「蟬」(巻三、九一―一〇二)

○「高等小学綴り方^二学年用」、芦田恵之助著、大正2年2月10日、宝文館→例文「赤ん坊」・「春が来た」(巻三、八一―一〇二)、例文「滑稽」(巻三、四五―四六)。(ただし、この一学年用は、未見。)

○「俳諧大要」、正岡子規著、大正2年7月20日、俳書堂→例文「桜」(世の中は三日見ぬ間に桜かな 去来)(巻三、五五―五九)、例文「泥鰌」(わが事と泥鰌の逃げし根芹かな 丈艸)(巻三、五九―六二)、例文「燕」(鐘楼へは懲りてはいらぬ燕かな 也有)(巻三、六〇―六一)、例文「初雪」(初雪やくばり足らいで比枝ばかり 蝶夢)(巻三、六一―六二)、例文「角力」(飛び入りの力者怪しき角力かな 蕪村)(巻三、六二―六五)

○「漢字の研究」、安達常正編、明治42年11月20日、六合館→例文笑話「天気予報」(巻三、六八―六九)、例文「おほさかよりきしう」(巻三、七一―七二)、例文「試験問題」(巻三、七四―七五)

○「普通文章論」、幸田露伴著、明治41年10月28日、博文館→例文「酸と三」(巻三、七二―七三)、例文「蛙と鮠」(巻三、七六―七八)、例文「ブドウとブドウ」(巻三、七九―

八〇―)、例文「説明文」→「送り仮名」(巻三、八二―八四)

○「俚諺論」、大西祝稿(未見)→例文「俚諺」(その一―その

五)(巻三、五六―五九)

○「桃蹊録」(未見)→例文「国歌の綴り方」(巻三、八〇―八一)

ほかに、出典を明記しない文章一―例ばかりを例文として収めているが、出典の明らかなもの多くは、明治末期・大正初期に刊行された諸書(稿)の中から選ばれ、平易・軽妙・的確・適切な例文が多彩に採られている。引用者垣内教授の文章鑑識眼の凡でなかったことを思わせる。

正岡子規著「俳諧大要」からの蕪村の句「飛び入りの力者怪しき角力かな」の解釈例などは、後年「国語の力」(四文の律動)にも引用されており、これは、「国語の力」の成立過程の考察にも、手がかりの一つを与えるであろう。

また、芦田恵之助著「高等小学綴り方」からの引用は、「国語の力」(一解釈の力、ほか)に同じく芦田恵之助著「読み方教授」(大正5年4月21日、育英書院刊)から「冬景色」授業記録の引用がなされているのに照らし、垣内・芦田両氏のごく初期の出あいの一つを語るものとして注目される。両者の刊行書肆が同じく宝文館であったことも、あるいは出あいの機縁の一つをなしたのである。

五

同上書巻三の「九 総括」において、垣内松三教授は、「措辞法」学習の重要性について強調したのち、「我が国語の洗練、国民文体の統一は日本民族の急務であり大業である。しかもこれ等の問題の

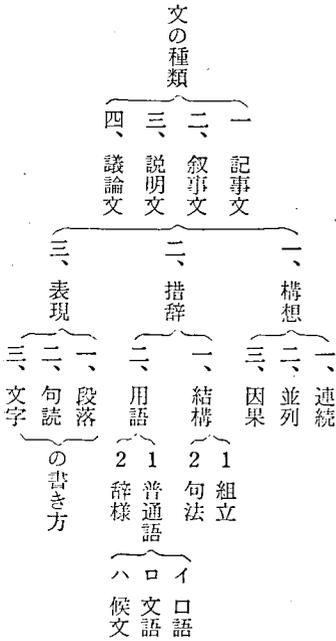
解決は国民の中堅たる諸子の力に俟つの外ないのである。作文練習の中特に措辭法には、此くの如き重大なる懸案がある。一文を綴る時にも、各目、国民文体を創造し、改正する覚悟を以てすれば、恐らくは誤謬・疵瑕を削除し得て、普通文・口語文・書翰文のそれ／＼に清新なる措辭を見るに至るであらう。」(卷三、八八―八九ペ)と述べている。

このように、国民文体の創造・統一・改良・改正に貢献するように、覚悟を促しているのは、後年の垣内教授の問題意識がすでにここに根ざしていたことを示すものとして注目させられる。

卷末には、卷一から卷四まで、各一年間の作文学習の成果を第一「第四「私の文集」としてまとめる作業を提示している。この「文集」作製もまた、注目すべき着想・試みの一つというべきである。

六

つぎに、「作文教科書」卷四においては、構想法の基礎に立つて、文章を、記事文・叙事文・説明文・議論文の四種に分類し、それらを、左のように表示している。



(同上書、卷四、一三ペ)

垣内松三教授は、在来の文章の分類のしかたについて、1目的より見たる分類(実用文と美術文の二とするわがちかた)、2形式より見たる分類(措辭法を標準とする分類、1単文・重文・複文、2追歩式・列叙式・頭括式・尾括式・両括式、3文語体・口語体・候文体など)、3思想より見たる分類(記事文・叙事文・説明文・議論文、ほかに、抒情文・書翰文・儀式文など)、4以上、1・2・3を混同した錯雑分類、など、四つをそれぞれ批判し、記事・叙事・説明・議論の四体を基本として設定し、各類について、つぎのように組織し、記述された。

一 作文練習の目標及方針

二 記事文

- 一 記事文の目的及方法
- 二 記事文三題
 - 一 千里の春 (大和田建樹作)
 - 二 碓氷より (徳富健次郎作)
 - 三 樺の林 (長谷川二葉亭作)
- 三 記事文の種類
 - 一 校庭小景
 - 二 室内の記
 - 三 我が秘蔵する品物
- 三 叙事文
 - 一 叙事文の目的及方法
 - 二 叙事文四題
 - 一 明治天皇御大葬の夜 (徳富蘆花作)
 - 二 西洋雑話 (「国定高等読本」)

三 安着を知らず文（佐々木信綱作）

四 山中鹿之助の画像に題す（作者記入なし。）

三 叙事文の種類

問題 一 日記の一節 二 我が日課

三 卒業を祝する文

四 説明文

一 説明文の目的及方法

二 説明文五題

一 住人の意義（山路愛山作）

二 陶磁器（中村康之助稿「工業常識」）

三 足跡（大町桂月作）

四 約束（坪内雄蔵作）

五 歌の解釈（武笠三作）

三 説明文の種類

△○敷きのしの仕方（女中のために）（「婦人の友」の文章に拠る。）▽

問題 一 家政の本領 二 家具の種類

三 食事のお行儀（子供の為に）

五 議論文

一 議論文の目的及方法

二 議論文三題

一 実物教育（羽仁もと子作）

二 過失に対する正しい考へ方（羽仁もと子作）

三 人の妻（幸田露伴作）

三 議論文の種類

六 総括

問題 一 「第四私の文集」を読み、二 学校を去るに臨

みて——引用者注、右のうち、△▽印ならびに（）内の作者記入は、便宜、引用者において施したものである。

右のように、巻四は、序章（第一章）・総括（第六章）のほかは、各章（第二章―第五章）ごとに、その文章形態に応じて、まず目的および方法が説かれ、つぎに実例が掲げられ、その種類が説かれ、おしまいに学習・作業問題が提示されているのである。

巻四に収められた例文については、垣内松三教授の分析がなされている。たとえば、「叙事文」の例として挙げられた「明治天皇御大葬の夜」（徳富蘆花）については、つぎのように述べてある。

一 構想法 七時五十分から八時少しく過ぎるまでの間の出来事を経験の順序に従つて書いてある、「余が家の奉送」「東京の空の光」、轟く音に靈輦の過ぎさせられるあたりを想ひやりて立ちつくす心のうつりゆきも精しく表はれて居る。この観察思索の深さ、高さをよく味へ。

二 措辞法 記事的叙述としては卓子の位置がやゝ不明かとも見える。もしこの位置が明に理合されたら、ランプも家族の位置もよく分るであらう。大砲の音の形容の「揺り撼かして」といひ切つた言語の趣きを考へよ。東の空の明光を「さす息引く息であるかのやうに」は単に光を形容する比喩であるのみでなく、天地息を凝らして声を呑むやうに見える。弔砲の響、鐘の哀音は作者の胸の響きのみか、我が日本国民の胸の響の一通つて轟くやうに見える。「輜車は今何の辺を過ぎさせられるのであらう」の如き

読者をして肅然襟を正さしむ。

この真率にしてしかも整齊せる詩人の靈筆は「明治天皇御大葬の夜」を描き出して千万言の叙事文にも優る印象を与ふ。よくこの叙述法を精読せよ。(以上、卷四、四四―四五ペ)

構想・措辞の両面にわたって、こうした分析・考察・誘導がなされているのである。記事・叙事・説明・議論の四体について、目的・方法・種類に的確な説明を加え、例文について精細な分析を試みている。それらを簡明に記述して、四体の特質を明らかにし、女生徒の理解に資している。

さらにまた、垣内松三教授は、この卷四において、正叙法と曲叙法との関係について、つぎのように述べている。

「元來文章の研究には文法学と修辭学とがある。その差異は一は國語の基本形態たる正叙法を研究し、一は國語の特殊用法たる曲叙法を考察することである。正叙法と曲叙法とは文の組立・句法・辭様・用語を異にするが、文の結構の基礎に於てはもとより全然別種のものでない。言ひ換ふれば曲叙法は必要上、正叙法の辭句を省略・転倒・重複・短縮・敷衍等の方法を用ひて變化したものである。故にもし曲叙法を轉換補正すれば正叙法ともなし得るのである。従つて文の結構の根本に於て全く異つた二種のものがある理由は無いのである。即ち文法的、文章学的分類の二つは文の本体とその變化とを見て二種類に分つたのではあるまいか。」(卷四、六一―七ペ)

ここには、文章の形式にのみとらわれないで、その原形を見ていこうとする、垣内教授の根本態度がうかがわれる。

垣内松三教授は、卷四の「総括」(第六章)において、つぎのよ

うに述べられた。

「以上記・叙・説・論の四体に通じて作文の目標方針を学んだが、我等はこれを体得して、いつまでも文を楽しむ人とならねばならぬ。又これを現代生活の實際に應用する習慣を得る為に練習を努めねばならぬ。

これまで女子の文章は花鳥風月の閑文字を引しまらぬ措辞を以て綴つたものが多くて、真に日本の女子らしい、いひ方の談話文章が充分工夫され洗練されて居ないやうに思ふ。今後学校で学んだ作文力に由りて

一 人に知らすため

二 印象を記すため

三 感想を記すため

の諸種の文章を自由に、生きた語を以て書き表はして、各自我が國民文体を改正し建設する考を以て談話文章を洗練せねばならぬ。もしこれまで学んだことに由りて作文の目標を知り、又推敲の方針に習熟し、更にその力を活用して父兄や夫の爲にも、文章起草の相談相手となり、これを批評し、助言し又、多忙の爲に不注意の錯誤をなして公衆の前に恥辱を受けるやうなことはないやうに、字書を用ひて文字用語等を調査し補正して親切な秘書となるだけの素養があるならば、如何ばかり、役に立つ人として生き甲斐のある其の日々を送ることが出来るであらうかと考へる。

文明の進歩に伴ひ今後、全ての階級に通じて作文の力を要することとは言を俟たないのである。もし作文課の作業に依つて『作文力』を自得すれば一生を通じて働く力、力を作る力となることを確信するのである。」(卷四、一〇四―一〇六ペ、傍線は引用者。)

ことに、結尾の二文(傍線部)には、垣内松三教授の作文学習観がこめられている。作文の力、「作文力」→「一生を通じて働く力、力を作る力とあるのは、後の「国語の力」の「力」を思いあわせて、そこに一種の呼応を認めることができる。

七

「女作文教科書」(巻三・巻四)が刊行された大正五年(一九一六)、当時、垣内松三教授は、東京女子高等師範学校において、「修辞学」・「国語」(講読と作文)、「国語」は、「現代文抄」をテキストにして、また、「徒然草」をテキストにしてVなどを担当されていた。

三浦ひろ氏(東京女高師文科、大正五年入学、同九年三月卒業)の回想(雑誌「同志同行」第八卷第六号、昭和十三年二月一日刊)所収、「有難い先生」によると、「修辞学」の講義は、菌のたかない難解なものであったようだ。漱石のものをよく例にとつて話を進められたという。また、「作文」の時間には、添削もされた。このことについて、三浦ひろ氏は、

「作文をかへして頂く日は特に心の中をうれいしものが朝から往來してゐるやうに思はれました。自分達の作文を材料にして、人間の生活の美しいものを示して下さるやうな先生の御指導は、自分の文がよいとか悪いとかを問題外にしてとても有難いことでした。

かへして頂いた文に朱書の添削など見つけると、押おいいだくやうにして読んだものでした。私はこの作文の時間に自然現象によつて、或は社会生活によつて、人は深く養はれてゆくものだといふことを心から理解させられたのだと思つてゐます。これは私の其の後の生

活に単に文を作るといふことだけでなしに、すべての点で大きい影響を与へてゐたのです。今でもあの垣内先生の作文がもう一二年つゞいて御指導願はれたら、どんなに私達は幸福だったか知れないと思ひます。私たちは二年以後卒業まで、この時程真剣に作文を御指導いたゞいたことは一度もありませんでした。」(同上誌、一〇七—一〇八頁)

と述べている。

こうした、東京女高師における「修辞学」(講義)・「作文」(実習)の研究・指導の体験が、「女作文教科書」に、簡明に結晶しているとも見られるのである。

「女作文教科書」(巻三・巻四)が刊行された大正五年(一九一六)の、その三月一日には、五十嵐力編「高等女子新作文」(四冊、大日本図書)も世に送られた。豊富な資料・文話が収められ、女生徒用の作文教科書として、意欲的な構成になっている。垣内松三教授の「女作文教科書」は、五十嵐力博士のそれと並んで、大正初期の女学校作文教育に資するものとして、特色深いものとなっている。体系的集約と簡潔な叙述の間にかがいがいるものは、決して平板な便宜になったものではない。すぐれた、真摯な作文教育観の裏づけのあることを認めうるのである。

(昭和43年4月5日稿)

——広島大学教授——